一九五二年九月号
「新潮」

若し私が年金を受けたなら、真理よ、自由よ、勇気よ、皆おさらばである。

――堺利彦訳「ルソー自傳」――

ルソーをめぐる人々の思い出

1

これまであまり気がつかずにいたのであるが、何かの折に自分の一生をふりかえって見ると、私は若い時分から、ジャン・ジャック・ルソーのことをよく知りもしないのに、思いがけないほど彼の影響を受けているのではあるまいか、――そういったことが、最近しきりに思われるようになって来た。

私がはっきりとルソーの名に接したのは、一九〇〇年（明治三十三年）で、中学生のとき

で、篤介早稲田のある学生から、"ルソーの民約論・中江兆民さん"といった形ちで、ほんのちょっと伝えられた程しか聞きかじりにすぎなかった。ルソーの全貌がいくぶんわかって多少くわしく知ったのは、それから十一年もたってから、堺利彦(枯川)さんの"ルソー自伝"を読んでからである。革命的政論家としてのルソーの面を伝え聞いたときである。フランス革命・それから

堺さんの名が、深く私の心に植付けられたのは、日露の戦雲がだんだん急を告げてきたとき、"万朝報"で非戦論を唱え、最後へ悲痛な"退社の辞"をかかげて、内村鑑三さん・幸徳秋水(伝次郎)さんと三人で"万朝報社を去っ

た（一九〇三年、明治三十六年の秋）、三人（内村鑑三、幸徳秋水（傳次郎）、堺枯川（利彦）の非戦論の主張をきいたとき、そのころの私は、非戦論が正しいか、どうかについて、よく分らなかったが、権威に屈服することなく、断乎として進む堺さんたちの勇気に感じ入り、感激したのであった。そのとき私は学生として東京に出ていたのであるが、一九〇六年（九年）の春には学校をやめて郷里にかえって家業につき、その初夏には、幼少の折から私の家でいっしょに育ってきた許嫁と結婚した。しかし

中央公論社原稿用紙

4

題名の

四六版 何冊かの小冊子

実録

依然として、その家に住んで、今までどおりの生活をつづけていたのである。

ちょうどその頃、堺さんの新著で「家庭の新風味」が現われた。

これは文学趣味の濃厚な本で、その中で堺さんは家族制度や夫婦関係について、新鮮な進歩的見解を示された。私たちの結婚や家庭はいつも旧い形式のものであり、せっかく「新風味」を読んでも何一つ実行しえなかったように覚えている。しかし、とにかく、この書は、家族制度や家庭生活について、新鮮な・社会的感覚を、植付けてくれ、そして堺さんを人間的な記念の書であった。

人間的な

中央公論社原稿用紙

いえば、何かやさしいおぢさんのような印象を好感を、私に与えてくれたのである。"赤旗事件"というのは、たしかその翌年（一九〇八）あたりの出来事で、そのとき、有力な社会主義者であることを、はじめて知ったのであった。けれども堺さんの「新風味」で受けた柔かい印象のためであろうか、私は"怖い人"とか"恐ろしい人"とかいった感じを少しも受けなかった。

それから（およそ）四年の後に、私は大学の助手として仙台にいた。そのときである、堺さんの「

ルソー『自伝・赤裸の人』が出版されたのは（一九一三）。私は早速それに飛びついて再読三読した。序文によると、そのころ日本では、『民約論』が行われているが、『エミール抄』はあるが廣く読まれず、自伝も翻訳で時々抄訳される程度とある。自分は獄中で、原書『懺悔録』の英訳を読んで、大胆卒直な告白に敬服し、「人間の真相を知る」に有益なものとして、前の年の九月から『二六新報』に連載したのだとある。自分は「可なり忠実な、可なり細密な注意をし

7

まったくこの本は面白かった。[redacted] ルソーの書込について[redacted] 何か知らなければ 十八世紀のヨーロッパ社会[redacted] 知識が足らないので、[redacted] よく理解できなかった。ほんとうに面白かったのは、いわば小説的興味からであった。

た積りしだが、「とにかく此書は「ルソー自伝」である」とかある。[redacted] 抄訳と いうちの[redacted]、一頁

廿者ではない、堺利彦の抄訳したコルソー自伝一頁

四三二字詰で三八一頁、外に年譜を添えてある。実質的へは相当詳しい本で、これが平易で[redacted]

[redacted] 達の文で書かれている。「つい最近もこれを通読したのであるが、さすがにえらいものだと思った。一般人むきの[redacted] 伊訳としては、固有名詞の外へ、ちょっとも[redacted] 手を加えるなら、今日でも立派に通用する。

堺さんの序文の終りには、「左の諸氏に對し、謹ん……

本当のところであろう。しかし それにも拘わらず、この書は自由・独立の[redacted] 私を教えてくれた。

精神が、人間にとっていかに尊いかを教えてくれた。それは、町人の子として生れ、官僚的階級制に對して、ひそかに本能的反感を抱いていた官学の助手にとって、何よりも大きな教訓であったと思っている。

それに本二人、自由・独立の

中央公論社原稿用紙

⑥

ルウソオは「自由に於ける人」の父であつた。近代の人の物は又々に胚胎して居る。

で敬意を表す」として、その中に、「此書の英訳書を貸して呉れし幸徳秋水氏」が挙げられている。

この書の初版は一九二二年一月廿日発行とあるが、堺さんが抄訳した英訳本の持主幸徳さんは、既に一九一一年一月廿四日に、大逆事件で死刑になっていたのである。堺さんとしては、幸徳さんの、親友であり同志である記念の意味も含めて、この書物をささげたのかも知れない。

……が、一個所フーデトー夫人を書いている外、全部ホルバッハ夫人となっている。しかもそれがd'Holbach（この本ではホルバッハ）の夫人でないのだから、読者に一個所出て来るから、まことに困るばかりか、本当のMme d'Holbachが……

一序アキ

それなら私がどうして「ルソー自伝」に飛びついたのかといえば、それより前に、島崎藤村さんの「随筆感想集」を愛読していたからだ。その中には「新片町より」（一九〇九）、"ルソオの「懺悔」中に見出したる自己"という文章があって、それによると島崎さんは二十三歳のとき（一八九四、「文学界」が生れた翌年あたりのころであろう）、石川角次郎という人が、アメリカから持って来たルソーの英訳を借りて読んだという。

そして「私はその頃、いろいろと艱難をしてゐた時であつた。心が暗かつた。で、偶然にルウソオの書を手にして、熱心に読んで行

くうちに、今迄意識せずに居た自分といふものを引出されるやうな気がした。此書を通して、近代人の考え方といふものが、私の頭に解るやうになつて来て、直接に自然を観ることを教えられ、自分等の行くべき道が多少理解されたやうな気がした。……それはずつと以前の話だが、その後……私はギヨエテの所謂『藝術の国』を離れて、復たルウソオに帰つた。そして、更にルウソオから出発した*」

「私がルウソオに就て面白く思ふことは、……

唯「人」として進んで行った処にある。あの一生煩悶を続けた処にある。ルウソオは人の一生に革命を起した。その結果として、新らしい文学者を生み、教育家を生み、法学者を生んだ。ルウソオは「自由に考える人」の父であった。「ルウソオの「懺悔」を読むと、所謂英雄豪傑の伝記を読むやうな気がしない。……彼の一生に近づくべからざる修養も見えない。吾儕は彼の「懺悔」を開いて、到る処に自己を発見することが出来る。」

島崎さんのこのような見方が、正しいかどうかについては、議論の余地がある。だが、ルソーについて何一つ知らなかった、

青春の私 年少だった私は、この文章を読んで強く打たれた。私は

私は、文章に 私の心を打った

その島崎さんの文章を読むと、私は ル
ソーについて、何一つ知りもしないくせに、まず 近代的自由思想家としてのルソー
にあこがれてしまったのである。「新片町より」
の序文にある、「吾儕は『人』としてこの世に
生れて来たものである。ある専門家として生
れて来たものではない」という言葉は、ルソー
の一生を島崎さん流儀に解釈して、さらに強
調したものであろうが、それは私の人生観や
学問に対する私の態度の上に、大きい
影響を与えたものであった。だからこそ私は

13

人間ルソーの全貌を知りたくて、堺さんの「ルソー自伝」に飛びついたのであった。

＊今その文章を読みかえしてみて気がついたのは、島崎さんはルソーを、ベルナルダン・ド・サン・ピエールにおける自然描写や、自然の描写における…を深めたが、等々や、抒情・告白における、ラマルティーヌ、等々、ドウ・スタール夫人などが中マンティスムの父と見ないで、専らフロベールやモーパッサンの前駆者として見ていることだ。

今日の文学常識からみると、ちょっと意外に思われるが、それもいうのも

自然主義時代の島崎さんは、多分、ルソーを専ら「懺悔録」ばかりによって見ていたからであろうと思う。このような見方は、「何故告白というものが、自然主義小説の主要なテーマとなったか」という、中村光夫さ

こういうところから出発した
＊＊しかし島崎さんも後には
なって、だんだん
と文学の専門
家になってしまつたように、私には感じられる。

一九五二、

んの課題（「文藝」六月号、「半世紀の過去」）に
対して、何等かの暗示を与えなかったであろう
か。

一行アケ

さて私は死ていう
わけで、あまりに抄訳で、私は堺さんの本
を読んだのであるが、抄訳ではどうも物足
らなかった。そのうちに生田長江さんと大杉栄さんの共訳
の、『懺悔録』（一九一五、六・七月）が新潮社から出
た。全部六号活字で組んであって、少し読みにくい
が、それは
であったが、訳文がよくわかった。私にとっては感
激の書であった。その証拠に、その翌年

ほんもの全訳で

堺さんの本を全く口語体によく翻訳は自由自在なかったか。

14

ある雑誌の「現代青年に読ませたいと思う書籍」という、アンケートに答えて、私はその書物の（トルストイの『戦争と平和』などと共に）あげ、その上「いわゆる修養書とか立身伝とか偉人伝とかは、現代青年に取りて、寧ろ有害無益に近いと思われます」と述べている。しかしそのころの私は、ずいぶん事務の仕事に追われがちだったので、ルソーの本をどれだけ読みとることが出来たか、疑問のように思われる。それにしても大杉さんは私と同じ年だから、あの訳をあさったのは三十歳の時だ。それも忙しい運動やら雑誌の編集やらの片手間で、ああいった立派な仕事を平気で仕上げている。何といっても、よほどすぐれた人であったに相違な

い。
それに「民約論」が中江さんによって訳されたとすれば当然としても、「懺悔録」が堺さん大杉さんといった、社会主義者の手によって、傳えられたのは、意味深いことであると考えられる。それにこの二人とも、後にそれぞれ自叙伝を書かれているのも面白い。（それは共に「改造」に連載された。）
大杉さんに関連して思出されるのは、伊藤野枝さんのことである。平塚明子さんの論集「円窓より」（一九一三年）を読むと、「欧洲に於ける婦人運動は、かのルーソーの自由平等の天賦人權説に刺戟せられ、個人主義的思想

の発展に伴ふ婦人の自覚に基く」とあるし、また一方、日本の婦人運動に大きな影響を與えたエレン・ケーは、ルソーの大きい影響を受けた人であるから、野枝さんもルソーと無関係とはいえないような気がする。私は一九一五年のころ、野枝さんと文通をしたことがある。（注）そのころの私は、平塚明子さんを中心としてグループの雑誌「青鞜」の読者であった。その雑誌に野上彌生子さんの訳で、「ソニヤ・コヴァレウスカヤ」が連載されたが、数学関係の事

18

用語について、ちょっと注意したいと思われる個所があった。私は野上さんの住所が分らなかったので、雑誌の編集責任者であった伊藤さんあてに手紙をやることにした。それというのも私はその一九一四ころ野枝さんが訳された『婦人解放の悲劇』—それはエレン・ケー女史の『恋愛と道徳』の他に、無政府主義者のエンマ・ゴルドマン女史の『結婚と恋愛』他二篇を収めたもの—を読んで、野枝さんの若々しい仕事ぶりに、関心をよせていたからであった。野枝さんからは長文の手紙が来た。ただの礼状では

なく、それは主として「青鞜」に對する（男子）知識人の無理解と、進歩的な婦人新派の經營難を訴えられた、興味の深い手紙であった。いつの間にか、この手紙が失われたのは、惜しいことだ。大杉さん。それにしても野枝さんの一生こそは、日本における一種の典型的な、人間解放・婦人解放の悲劇であったように思われる。

＊コヴァレウスカヤは、婦人解放問題の立場から甚だ注意すべき、代表的な女性數學者であるが、私はまだこのような問題を研究している科學史家がいるかどうかを知らない。

それから三年ばかりの後、一九二〇年の一月下旬に、私はパリのパンテオン廣場に面した宿にいた。私の宿のすぐ前に、誰かの立像がたっていたが、間もなくそれがルソーだと知ったときは、何か嬉しい気がした。こうして私は自分の室から、ルソーの像を二年間も見下ろして暮したのである。

昼間は観光客や外国の青年らしい人たちが、時々像の前に立っていることもあったが、夕方になると、像のあたりは大抵、幼児をつれた、子守りのような娘さんたちの遊び場となった。

（2）

今考えると不思議なほどだ

そのころの私は、既に述べたように、「懺悔録」をざっと読んだ程度であったのに、もうそれでルソーを知ったつもりになっていた。その半年間の滞在中も、ルソーの著作を買いもしなければ、ルソーに関する書物も、読みもしなければ調べもしなかった。

ルソーに対して無関心だった。

ただ

いま私の手許にあるガルニエ版の「エミール」は、同じ宿にいた、東ヨーロッパのある国の学生が、その宿を去るとき置いていったのを、私が宿の娘さんから貰ったもので、いまもその書物の中に、その学生が残

した、フランス語とルーマニア語か何かの對訳表が、一枚示されている。私ははじめの五頁ぐらいしか読んだことがなかった。あまり易しくもない本なので、必要に迫られない限り、読めるものではないかもしれない。

しかしフランスに住んでいた間、ルソーを理解するのに相当役立ったらしい。

けれども不思議なことに、ルソーが持ついろんな面の中で、"自然に帰れ"という面は、いつの間にか、私の心の深く染みこんでいたものと見える。（それも、まだ読まないうちから不思議なものだが。）日本へ帰った

直後の講演（一九二二、大正十一年）で、アインシュタインの新相対性原理に現われた、新らしい幾何学について語りながら、私はこう述べている。――「"自然を認識せんとする希望が、数学の発達に最も永久的で而も最も有效な影響をおよぼしたと、二十年前にポアンカレは申しました。"自然に帰れ"という、ジャン・ジャック・ルソーの叫びは、文字通りの意味に於て幾何学者への忠告であらねばなりません。」私もこの考えは、そのころからだんだん構成されていった、私の数学教育論*の上に

~~基本的~~

んも、大きな影響を与えた。

私は、初歩の階段にあつては、ユークリッドの代りに、

神を養成すぎたしよりか、むしろ何んして、数学的精

先づ直接ん子供の立場

大自然から学ぶべきであることを説りた

私の主張と

の尊重や、その他いろんな重要な点において、ルソーと共通の傾向には

考えが、相当へのである。

『エミール』を読んでない私は、断片

結果、そういうことになったの

自然を

的には二、三の教育書から孫引きしたのかも知れないと考えよ。*

*たとえば、『数学教育の根本問題』（一九二四）という書物の著者

書物の序文は、さきに述べた島崎さんの言葉が掲げ

られている。

それは私が『エミール』をまだ読まないうちだから、不思議なようでもあるが、そのじつ、

24

私が二、三のありふれた教科書から断片的に抜き出したのが、そういう結果になったのだと思う。なぜなら、ルソー伝の作者アルテュール・シュ―ケがいったとおり、『エミール』ほど大きな影響を与えた作品はない。創るところで人は、その模倣をしたり、訂正をしたり、批評をしたりしているのだから。

間もなく私は病気になって、大正の末から昭和のはじめにかけて、二、三年の間静養した。その病臥中に、平林初之輔さんと柳田泉さんと共訳の「エミール」（初版は一九二四年）を、半分ほど読んでみた。訳はかなりよく出来ていると思うが、何といっても寝ころんで読むべき本ではないのだ。私は面倒なところを飛ばしながら、はじめから第三篇の中ほどまでと、それから第四篇の一部（あの名高いサヴォアの僧侶の信仰告白）を、おって読んでみた。それで私の中で、ルソーの精神をあまり誤解していないか

つた、感謝したのであつた。平林さんといろいろの交渉をもつた。平林さんが訳された、ポアンカレの『科学者と詩人』(昭和一九二八)の原書は、岩波茂雄さんを通じて私がお貸したものだ。岩波さんは、「何か訳して面白そうな本はありませんか」といわれ、この原書を他の本といつしよに持つていつたので、平林さんが訳されたことは、訳が出てからはじめて知つたのである。そういう縁故もあつて、私がその翌年春数学の階級性に関する

一九二九年、論文を『思想』に載せたとき、平林さんは早速『東京朝日新聞』の文芸欄で取上げて、きわめて好意ある批評をしてくれた。

いたのであったが、私の論文が『文学評論の諸問題』の著者によって紹介されたことは、意外でもあり、感激でもあった。

その直前に、平林さんは文学の社会的価値と芸術的価値についての論争を中村武羅夫氏とやっていて、いよいよこれからというところで、やがてフランスに留学され、パリについて間もなく、病死されたのはまことに惜しかった。たしか一九三一年の秋だったと思う。講演のため広島に滞在していた私が、川に臨んだ閑静な旅館から、平林さんの追悼の電報を東京に送ったのを記憶している。

(広島の原爆の中心地のすぐ傍である)

その時の廣島の講義の一部を基にして、私は「数学教育史」（一九三二）を書きあげた。その中には「懺悔録」と「エミール」から少しばかり引用した。ルソーの数学教育に対する考え方は、少くとも数学教育に関するかぎり、極めて進歩的なものであった。それは二十世紀のはじめにおける、ジョン・ペリーなどの数学教育論と直結するものだと、私は思ったし、今でもそう考えている。

抜書をした。

一行アケ

それから二十年たった。

今年の春になって、私はある必要から「懺悔録」を丁寧に読み、ともに[illegible]後篇は二つも読みかえした。つづいて「エミール」の第五篇まで原本と対照しながら、ところどころ読んでみた。これまでよく会得されなかったことが、この老年になって、かなりよく解るようになった気もするし、こんなに面白いものを今まで知らずにいたとは、ずいぶん損をしていたという感じもする。もし幸にして健康がゆるすなら、今度は「新エロイズ」を原書で、ゆっくりと読んでみたいと思っている。

一九五一・七・末

世の中には、一度も会ったことがないのに、妙に忘れられない人があるものだ。ルソーの訳者であった堺さん・大杉さん・平林さん、それに幸徳さんや野枝さん。――こういう人たちの名は、私の胸に深く刻みつけられて、何かの折りには、きっと蘇ってくるのである。

一九五二、七、七

小倉金之助